CARILLON カリヨン

日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学 学報

Contents 目次

デジタルで見る防災活動 ～新聞報道でふりかえる～

■2014年度掲載記事 …… 2～4

■2015年度掲載記事 …… 5

防災キャンプの始まりと経緯

■及川先生にインタビュー （文責：高田　由美）…… 6

■「赤十字みんなの防災キャンプ」がめざすもの

日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学　赤十字地域交流センター　センター長　廣渡　太郎 … 7

■キャンプを楽しみながら防災を学ぶ

日本赤十字秋田短期大学　助教　及川　真一 … 7

第8回「もっとクロス！大賞」で準グランプリ受賞！ …… 7

2015年度着任した若手教員からのメッセージ

～本学の災害救護訓練に参加して～ …… 8

助教　大山　一志　　助手　小野　真美　　看護学部　助手　児玉　悠希

助教　播摩　優子　　助手　渡部加奈子　　看護学部　助教　渡邊　紘子

2016 No. 5

カリヨンとは：（フランス語：Carillon）教会の塔などに吊り下げられる音程を異にする多数の鐘。16世紀以来、特にフランドル地方（現フランス領）で発達し、自動装置を持つものもある。赤十字の理念より「人道・博愛・奉仕」を3つの鐘に投影した本学のシンボルとして、平成8年の短大開学時に設置された。これにちなんで本学学園祭も「カリヨン祭」と呼ぶ。

日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学

デジタルで見る防災活動

～新聞報道でふりかえる～

「歴史をたどること」…それは現在の姿をより良く知り、将来を考えていくことにも繋がります。東日本大震災からまもなく5年、過去から現在までの防災キャンプのあゆみをたどり、将来に向けて何をしていけばよいのか、新聞記事のデータを通して考えてみませんか。

日赤秋田看護大・短大

飲み水確保、プライバシー尊重…

秋田市上北手の日赤秋田看護大と日赤秋田短大の学生を対象とした「防災キャンプ」が21日、同大学の体育館などで行われた。学生51人が参加し、飲み水を確保する仕組みを考えたり、避難所生活でプライバシーを守るための間仕切りを作ったりして、災害への備えを学んだ。

学生が「防災キャンプ」

避難生活へ備え周到

水のろ過装置を作る学生たち

秋田短大介護福祉学科の及川真一助教(39)が初めて企画した。仙台市出身の及川助教は、東日本大震災発生時に水道や電気などライフラインの寸断を経験、日頃から災害に備える必要性を痛感し、学生への防災教育に力を入れている。

学生たちは、ペットボトルに布、砂利、炭を詰めて雨水をろ過する装置作りに挑戦。複数回のろ過を効率的に行うために、三つのペットボトルをひもで結んでつるすなどの工夫を凝らした。乾電池とアルミホイルを使った火おこしにも取り組んだ。

間仕切り作りでは、プラスチック製段ボールを使用。50人分のスペースを確保するため、1枚当たり縦90センチ、横1・80センチの段ボールを割り裏を使ってどう組み立てるか、試行錯誤しながら作業した。

看護大2年の菊池文哉さんは火おこしに苦戦し、「マニュアル通りに手順を踏んでも、なかなかうまくいかないことが分かった」。秋田短大2年の嶋崎菜津実さんは「災害時に周囲の人を支援するため、少しでも多くの知識を身に付けたい」と話した。

学生たちはこの日、体育館に設営した間仕切りスペースに宿泊。きょう22日は宮城県石巻市を訪れ、東日本大震災の被災地を見て回る。

7月には県内の小学生を対象にしたキャンプが同大学の体育館で開かれる。学生たちも参加し、今回学んだ知識を子どもたちに教える。及川助教は「学生から子ども、子どもから両親へ『生きるための知恵』を伝えてもらい、地域全体に防災意識を浸透させたい」と話した。

避難所生活でプライバシーを守るための間仕切り

秋田魁新報
2014年6月22日掲載

河北新報
2014年6月23日掲載

避難生活 実践で学ぶ

秋田 看護学生がキャンプ

いのちと地域を守る

震災時の避難生活を想定し、対応を実践的に学ぶ1泊2日の防災キャンプが21、22両日、日本赤十字秋田看護大、短期大(ともに秋田市)であり、学生51人が知恵を出し合った。

東日本大震災時に住んでいた仙台市で避難生活を経験した及川真一助教が、飲料水や食料を調達する難しさやライフラインの大切さを学生に知ってもらおうと企画した。

学生たちは、水のろ過装置や段ボールで仕切る個人スペースを一から作った。炊飯に必要な火おこしや太陽光を使った湯沸かしにも挑戦。インターネットの情報などを参考にして取り組んだが、苦戦する学生が続出した。

及川助教は「災害時は、道具や食料がそろっていない。失敗した後どうするか考えることが大事になる」と助言した。

ろ過装置を作った短大2年の安田舞さん(20)は「仲間と声を掛け合い、試行錯誤した。日常にある水や電気のありがたさを感じた」と話した。

苦労しながら水のろ過装置を作る学生ら

1泊2日 避難生活指導

秋田の大学生 児童対象にキャンプ

小学生を対象に、災害時の避難生活を想定した1泊2日の防災キャンプが26、27の両日、秋田市の日本赤十字秋田看護大・短大で行われ、指導役として大学・短大の学生42人が活躍した。

学生は、石巻市を訪問し、東日本大震災の被災地の現状を自の当たりにし、学内で実施した防災キャンプで避難生活の技術を身に付けた。日頃の備えや防災教育の重要性を学んできた学生は、キャンプを通して児童を真剣に指導した。

希望して参加した市内の児童48人に、けがをした腕や足を三角巾で縛る手当てや、水のろ過装置作りなどを教えた。自分たちの経験を踏まえ、的確な助言で三角巾の上手な巻き方などを伝えた。

企画した及川真一助教は「何も分からず苦戦していた学生が成長し、たくましくなった。今後は高齢者施設などで学生の教室を開き、地域全体の防災教育を進めたい」と語った。短大2年の蛯名梁津実さん(19)は「学んだことを、分かりやすい言葉で伝えていきたい」と話した。

子どもたちに応急手当ての方法を教える学生(左端)

河北新報　2014年7月30日掲載

冬場の災害 実践訓練

日赤看護大・短大 秋田大学生20人 1泊2日で学ぶ

連携して避難所開設

秋田市上北手の日本赤十字秋田看護大と同秋田短大で21日、冬場の大規模災害に備える1泊2日の防災キャンプが始まった。同大と秋田大の学生20人が避難所の開設や運営を体験。身近な道具を使った火おこしや防寒具作り、被災者のプライバシーを守る間仕切りの設置などに取り組んだ。

ライターやマッチを使わず火おこしする学生

学生たちがボランティアスタッフとして避難所を運営する想定で実施。3班に分かれて避難者役を選び、役割を分担した。

はじめにプラスチック製段ボールを使って50人分の間仕切りを設置した。女性の着替えや子どもへの授乳など、プライバシーへの配慮が必要なため、フットサルゴールに青色のビニールシートをかぶせた授乳室も設置した。

実践的訓練を目指し、間仕切りを設置中の学生に急きょ、別の指示も出された。「避難者が火を求めている。用意してほしい」との要望に対し、学生は間仕切り担当から人を割いて火おこし係をつくり、乾電池とスチールたわしを使って火をおこした。

避難所開設に要する時間は50分と設定されていたが、実際には1時間半かかった。

短大1年の小玉愛華さん(18)は「一時間がかかり過ぎると避難者に不安を与えてしまう。一人一人の連携をしっかりしないといけない」と話した。

このほか、学生たちは空き缶を使って二飯を炊き、自炊した。体育館で就寝する際は、ちぎった新聞を詰めたごみ袋に体を入れるなどして体を温めた。

仙台市で東日本大震災を経験した秋田短大介護福祉学科の及川真一助教(40)が昨年6、7月に続いて企画。及川助教は「災害時は道具や人員が十分でない中、さまざまな状況に対応していく必要がある」と話した。

きょう22日は雪上で行つけが人の応急処置などを学ぶ。

プラスチック製段ボールを組み合わせて作る間仕切り

秋田魁新報　2015年2月22日掲載

冬の避難所生活体感

秋田の小学校で防災訓練

秋田市の上北手小で23日、雪国防災訓練があった。阪神大震災が起きた1995年の翌年以降、秋田市内の全小学校が毎年1月に実施している訓練の一つ。防災教育に取り組む日赤秋田看護大と日赤秋田短大の教官や学生らを初めて招き、避難所での過ごし方などを学んだ。

講師を務めた日赤秋田短大の及川真一助教は「万が一のときにできる行動は、いつもしていることだ」と、日常のあいさつや思いやる気持ちなどの大切さを強調した。

防寒着を身に着け、雪で足場の悪い屋外に避難するなど、冬ならではの状況下で訓練を実施。給食は避難所での食事を再現し、非常食のレトルトカレーと牛乳を用意した。児童は災害発生時の食料事情の説明を聞きながら、少ない量のカレーを味わって食べた。

同小6年の長沢航平君(12)は「避難者は二飯を食べるのも必死で、大変だと思った。自分も地震に備えたい」と真剣な表情で話した。

避難所での食事を再現した給食を食べる児童ら

河北新報　2015年1月27日掲載

防災意識高め命守ろう

日赤看護大 短大 学生、活動発表で訴え

東日本大震災から4年を迎えるのを前に、日本赤十字秋田看護大・秋田短大主催の公開講座「災害から命を守るために 高めよう!防災意識」が8日、秋田市中通のカレッジプラザで開かれた。参加者約100人を前に、同校の学生4人が「命を守る」をテーマにした防災訓練や教育について発表した。

4人は昨年6月、短大介護福祉学科の及川真一助教が企画した防災キャンプに参加。飲み水を確保する仕組みを考えたり、避難所生活でプライバシーを守る間仕切りを作ったりと、実践的な訓練を行った。7月には小学生を対象にした同様のキャンプで講師を務めた。

発表でこうした活動を紹介し、「災害への備えは物だけでなく、どこの避難所へ行けばいいか、物資が届くまでどのように命をつなぐかといった知識も大切」と強調した。

発表した古農修一郎さん(21)=看護大3年=は福島県浪江町出身。古里が大津波と原発事故に見舞われた震災当時の心境を「日本はもう沈没するんじゃないかと思った」と振り返った。同大入学後に取り組んでいる防災活動については、「被災した経験を基に学びや教訓を伝えることが、自分にできる一番の復興支援だと考えている」と思いを語った。

講座ではこのほか、同校の教員らが災害救護訓練・活動について講演した。

防災キャンプについて発表する学生たち

秋田魁新報
2015年3月8日掲載

防災キャンプ 紹介

備えの大切さ訴え

日赤の大学生が 秋田で公開講座

日赤秋田看護大・短期大(秋田市)は8日、防災意識を高める公開講座を同市で開き、市民ら約50人が東日本大震災の被災地支援や防災教育について学んだ。

学生4人が、火おこしや水のろ過など生きる知恵を小学生に伝えてきた防災キャンプについて紹介。「防災意識の低さが、想定外という言葉をつくった。備蓄だけでなく心構えや知識の備えも大切だ」と訴え、「自分の身を守れなければ大切な人は守れない」と呼び掛けた。

来場者からは支える側の支援の在り方について質問があり、日赤秋田県支部の碇谷満朗事業推進課長は「早い段階での心のケアが大事。事前の教育も必要だ」と強調した。

防災教育の活動を報告した大学生ら

河北新報
2015年3月9日掲載

「被災の現実、伝え続ける」

日赤秋田看護大・短大プロジェクト

教員、学生ら 取り組み発表

東日本大震災から4年を迎えた11日、被災地での復興支援や学生の取り組みを発表する「いま、私たちにできることプロジェクト」が、秋田市土北手の日本赤十字秋田看護大・秋田短大で行われた。同大の学生や市民など約70人が参加。震災当時を振り返り、災害発生時の対応方法などを学んだ。

東日本大震災 4年

非常食の炊き出し体験を行う学生ら

同短大介護福祉学科の及川真一助教(40)が企画した。始めに及川助教と震災発生時に日赤県支部の救護班として被災地入りした竹澤雄基さん(35)のトークセッションが行われた。

仙台市出身で震災当時は同市にいたという及川助教は、現在被災地にいない自分が東日本大震災を語っていいのか悩んだ時期もあったと明かしながらも、「どんな形であろうと被災の現実を伝え続けることが大切」と語った。竹澤さんは災害が発生した塩竈、避難場所として利用されることが多い学校について「施設が使われると子どもたちのスペースが奪われてしまう。どこまで利用可能なのか、日頃から関係者が綿引きについて協議する必要がある」と話した。

また、学生たちは非常食の炊き出し体験を行い、厚いビニール袋にコメと水を入れ、湯煎した お湯に入れる簡単な炊き方を実践した。この後、ボランティア活動を報告。このうち、昨年6月に及川助教らが実施した防災キャンプを経験した学生は、スチールたわしと乾電池で火をおこす方法などを紹介。キャンプ体験を通じ「命を守る力」を身に付ける重要性を説いた。

及川助教は「ボランティア活動で被災地に入っても、自分の身を守れなくては意味がない。今後も防災キャンプを通じて自分と他人を救うことができる人材を育て上げたい」と意欲を見せた。

震災発生当時の状況を振り

秋田魁新報
2015年3月11日掲載

河北魁新報
2015年3月12日掲載

震災について思いを語り合うワークショップの参加者＝11日午後2時ごろ、秋田市の日赤秋田看護大・短大

学生ら防災語る

備える

秋田

秋田市の日赤秋田看護大・短大では、震災に備えて語り合うワークショップがあった。東日本大震災の発生時刻には、学生ら参加者約50人が黙とうし、犠牲者を悼んだ。

仙台で被災した同大の及川真一助教は、宮城県内で撮影した写真などを基に被災状況を説明。「食料などの物資がする間くとは限らない。当時、新潟が揺いたことに驚き、情報を得ることの大切さを感じた」などと振り返った。

及川助教とともに企画を進めてきた短大3年佐藤悠太郎さん(20)は「被災地と秋田では4年の感じ方は違う。被災の全てを理解するのは難しいが、考えるだけでも防災につながる」と述べた。

福島県浪江町出身の看護大3年古農修一郎さん(21)は「経験したからこそ伝える使命がある。明日があることを当たり前と思わず、つながりを大事にしてほしい」と訴えた。

参加者全員は、福島への思いを込めるロックの楽曲を浜辺かべながら合唱。被災地に思いをはせ、防災への思いを新たにした。

河北魁新報
2015年3月12日掲載

看護の道 命守りたい

これから ―大震災を生きる 第4編

子どもたちに防災の重要性を伝える古農さん

第22部 私の一歩 ②

秋田市 古農修一郎さん(21)

「命を、守りたい」。その一念が人生の針路となった。

日赤秋田看護大(秋田市)の3年古農(このう)修一郎さん(21)が秋田市内に住んで4年になる。東京電力福島第1原発事故から間もなく、生まれ故郷の福島県浪江町から移住した。勉学の傍ら、小学生向けの防災教育に力を注いでいる。

原発事故時、避難所となった双葉高(福島県双葉町)には続々と住民が集まった。けが人を手当てできるのは高校の看護教諭ただ1人。手伝えることは、ラジカセやブルーシートを運ぶ程度しかなかった。

「高校生の自分にできるのは力仕事ぐらい。資格を取って看護師になりたい」。避難所で感じたもどかしさが、新たな目標につながった。

□

避難先の秋田で進学したものの、勉強は想像以上に大変だった。そんな中、介護などを学ぶ日赤秋田短大(秋田市)の及川真一助教と出会ったのが、もう一つの転機となった。

仙台で東日本大震災に見舞われた及川助教は、当時の経験を学生や子どもたちに伝える防災キャンプを秋田で運営していた。「緊急物資が届くまでいかにしのぐか」。参加したキャンプには、災害を生き抜くための知恵が詰まっていた。

「自分の経験もみんなに伝えていきたい」。及川助教に共感し、仲間と共に防災教育の活動に飛び込んだ。

子どもにとっては難しい内容かもしれない。それでも熱く語り掛ける。素直に学ぼうとする姿を見て、思わず声にが力がこもる。

□

震災と原発事故を通し、いかに日頃の付き合いが安心につながるかを知った。「最も大切なのは地域の連携や周りの人との協力」と訴えている。

顔の見える関係の重要性は、医療の現場も一緒だ。病気を治すだけでなく、患者の一番近くで心もケアしたい。医療系の中であえて看護師を選んだのは、そんな狙いもあった。

4月には4年に進級する。国家試験、就職活動に挑む1年が待っている。「自分に合っているかどうかは分からない。でも、自分で決めたことだから大変でも逃げない」

就職先の一つには福島県内の病院も考えている。「いつか古里に恩返ししたい」。もう、あの時の無力な高校生ではない。頼れる存在として郷里を目指す。

秋田魁新報　2015年6月27日掲載

空き缶炊飯、悪戦苦闘

学生83人 災害想定しキャンプ

空き缶を使った炊飯に挑戦する学生たち

秋田市内の学生を対象にした「防災キャンプ」が27、28の両日、岡市上北手の日赤秋田看護大・日赤秋田短大のグラウンドなどで行われた。同大や秋田大、県立大の計83人が参加し、空き缶を使って米を炊いたり、避難所の間仕切りについて考えたりして災害への備えを学んだ。

楽しみながら防災を学んでもらおうと秋田看護大と秋田短大が昨年から実施している。

学生たちは停電で炊飯器が使えない状況を想定し、空き缶を活用した炊飯に挑戦。缶の側面に穴を開けてコンロとして使い、その上に米と水を入れた別の缶を載せ、加熱を試みた。

だが、燃料の新聞紙や割り箸に着火してもすぐ火が消えてしまい、悪戦苦闘。燃料を入れるタイミングを変えたりしてもなかなかうまくいかなかった。多くの学生が失敗に終わり、災害時の食料確保の難しさを痛感していた。

また体育館を避難所に見立て、間仕切りの設置の仕方について検討。男女別に分けたり、授乳スペースを設けたりしてプライバシーに配慮した形を話し合った。

秋田短大介護福祉科の斉藤愛美さん(18)は「米を炊く際、(コンロとして使った)空き缶に酸素を送り込まなければ火力を保てないことが分かり、大変さが身に染みた。今回の経験を災害時に役立てたい」と話した。

秋田魁新報　2015年11月7日掲載

水の確保策 住民ら学ぶ

災害に強い地域へ 上北手でイベント

泥水ろ過方法に驚き

災害に強い地域づくりを目指すイベント「防災キャンプ」が7日、秋田市上北手の日本赤十字秋田看護大と同秋田短大で開かれ、地域住民や学生計約300人が災害発生時の水の確保や対応について学んだ。

会場にはブースが設けられ、米と水を入れたポリ袋をゆでて米を炊いたり、アルミホイルで包んだ肉を入れた鍋に炭を載せて蒸し焼きにしたりする調理法が紹介されたほか、キャンプ道具が展示された。

泥水をろ過する方法を紹介するブースでは、底を切り取ったペットボトルをひもで連結し、中に石や炭、砂利、手拭いなどを詰めたろ過装置を展示。上から泥水を流し入れ、下から染み出てくる水を再び上から流す工程を繰り返すと、泥水の不純物が取り除かれて次第に透明になり、参加者を驚かせた。

また、日本防災士会県支部の防災アドバイザー佐藤美子さん(54)が「自然災害への備えを学ぼう」と題して講演。「災害時に身動きが取れなくなり救助を求める場合は、人の気配を感じるまで体力を温存することが大切。周囲にある物を一定のリズムでたたいて自分がいるというメッセージを発してほしい」と呼び掛けた。

秋田市寺内の宇佐美光子さん(69)は「工夫次第で身近な物が便利な道具になると分かり、とても勉強になった」と話した。

泥水をろ過する方法などが紹介された防災キャンプ

秋田魁新報　2015年7月25日掲載

防災サマーキャンプ

ビニール袋で炊き出し体験

児童60人、火起こしも

秋田市の小学生が災害時のサバイバル術を学ぶ「防災サマーキャンプ」が25日から1泊2日の日程で、岡市上北手の日本赤十字秋田看護大・秋田短大で行われた。児童約60人が参加し、アウトドアの技術から生きる知恵を学んだ。

日赤県支部や民間企業、NPOなどでつくる「こども遊び応援実行委員会」(委員長＝及川真一・日赤秋田短大助教)の主催。東日本大震災を受け、2012年から毎年開いている。

この日は、先月に防災キャンプを行った学生ら約50人が指導役を務めた。炊き出し体験で児童は、学生の手本をまねしながら、熱に強いビニールにコメと水を入れて炊飯。最低限の量の水でご飯を炊く技術を学んだ。

ほかに火起こしや避難所の設営体験もした。昨年に続き参加した同辺小6年の長谷部音羽さん(11)は「災害時にどう対応したらいいかを学べた。いざというとき、人の役に立てるようになりたい」と話した。(石塚健悟)

コメを量ってビニール袋に詰める児童

河北新報　2015年11月11日掲載

日用品使いサバイバル

学生ら200人参加 秋田で防災キャンプ

いのちと地域を守る

地域住民の防災意識を高めてもらおうと、日本赤十字秋田看護大・短大（秋田市）で7日、防災キャンプが開かれ、学生と地域住民約200人が参加した。

防災キャンプは東日本大震災後、同大の及川真一助教が学生や小学生向けに継続。今回は初めて地域住民が加わった。

学生が講師役を務め、災害時に日用品を使って生き抜く手段として、ペットボトルと布などで水のろ過装置を作る方法を紹介。最小限の材料でご飯を炊く体験もあった。

秋田市のパート従業員沢井恵理子さん(60)は「これまでは防災をあまり気にしていなかった。今回を機会に、災害に対して常にアンテナを張っていたい」と話した。

学生と炊き出しを体験する住民ら

防災キャンプの始まりと経緯

現在、本学の防災キャンプに多大なる情熱と時間、エネルギーを注いでいらっしゃる及川先生へ防災キャンプの始まりと今に至るまでのことについて伺いました。

撮影日　2012年7月22日

2011年～
こどもサマーキャンプ…大自然と遊ぼう！

東日本大震災から１ヶ月も経たない、２０１１年４月１日に及川先生は宮城県仙台市から秋田県へ移住とともに本学に着任しました。秋田県は、東北の中でも震災の被害が比較的少ないにも関わらず、こどもを含めた地域の方々は海を避けていました。やはり、東日本大震災の影響が大きかったのでしょう。自然の中での活動は、自然と調和して生きていくことの大切さを理解するだけではなく、決まりや規律を守ること、協力することの大切さや自ら実践し創造する態度を学ぶなどの教育効果も期待されています。常日頃から大自然の恵みや素晴らしさを肌で感じ取っていた及川先生は、こうした大自然から遠ざかりつつある秋田のこども達へ、大自然から学ぶ体験プログラムを行いました。これが防災キャンプの前身となった「こどもサマーキャンプ」の始まりでした。

ペットボトルなどで作ったいかだに乗る子どもたち

いかだ作りや地引き網

市内外の親子ら 海の遊びを満喫

秋田市・桂浜

日本赤十字秋田看護大学と同短大主催の「海で遊ぼう！体験学習」が7日、秋田市浜田の桂浜海水浴場で開かれ、市内外の園児や児童、保護者ら約200人が参加、ペットボトルのいかだ作りや地引き網を体験した。

同短大の及川真一助教(37)が中心となり、子どもたちに海の楽しさを知ってもらおうと企画。同大と短大の学生約50人がボランティアを務めた。

いかだ作り体験で子どもたちは、学生に手伝ってもらいながら、自動車の古タイヤとペットボトル、断熱材を使って約2㍍四方のいかだ2枚を製作。完成後、子どもたちはいかだを海に浮かべて乗り込み、及川助教らに引っ張ってもらい乗り心地を楽しんだ。

盛岡市から家族と海水浴に訪れ、いかだ作りに参加した小本田斐君(7)は「あまり揺れなかったので、怖くなかった。みんなで頑張って作ったいかだに乗ることができて、楽しかった」と笑顔で話した。

防災キャンプの始まりとなった

こどもサマーキャンプ in 秋田

秋田魁新報
2011年　8月7日掲載

2012年～
東日本大震災の影響で遊び場を失ったこども達

大震災で被害を受けたこども達の話になります。震災発生直後から、及川先生は何度も被災地を訪れ、その際に東北各地の避難所などで、どんな困難な状況であっても前向きに活躍するこども達の姿を見てきたそうです。こども達の可能性は遊びを通じて身につくものと言われております。しかし、残念なことに被災地の遊び場は、瓦礫置き場などにより大きく変化しておりました。せっかくのバイタリティーを、発揮する場所が失われたままでした。そんなこども達に、今一度、大自然の中で力をおもいっきり発揮し、開放してほしい。学校や日常では経験できないことに、楽しく挑戦してほしいという願いから、宮城県、岩手県、福島県の各県から５０名を秋田に招いて、海、山、川で遊びを通じて、秋田のこども達との交流を行いました。

撮影日　2012年7月21日

撮影日　2012年7月21日

2013年～
大自然の中で誰とでも仲良くしようよ！

震災から２年目に入ったある日、及川先生のもとに一件の依頼が入りました。“他県から秋田へ避難しているこども達が土地の生活に馴染めていない”というものでした。そこで、これまで行ってきた野外教育プログラムのもとで、他県から避難しているこども達と秋田県に住んでいるこどもとの交流を図るために、海の家を貸し切ってサマーキャンプを行いました。

撮影日　2013年7月20日

撮影日　2015年7月25日

2014年～
赤十字みんなの防災キャンプへの発展と深化

２０１１年から行ってきたこどもサマーキャンプですが、もともとは大自然の恵みや素晴らしさを理解するとともに、“命を守ること”も強調してきました。４年目に入り、この原点に立ち戻り、こどもサマーキャンプを発展させたのが現在本学で取り組んでいる「赤十字みんなの防災キャンプ」です。今後、ここ秋田を拠点とし、防災キャンプはますますの深化を遂げるだろうと感じながら、及川先生へのインタビューを終えました。

（文責：高田由美）

撮影日　2014年7月27日

「赤十字みんなの防災キャンプ」がめざすもの

日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学
赤十字地域交流センター
センター長
廣　渡　太　郎

「赤十字みんなの防災キャンプ」は、東日本大震災を経験して海辺や屋外で遊ぶ機会を失った東北のこどもたちに再び笑顔を取り戻したい、という思いからスタートしました。この取り組みは、これからの赤十字を担う看護師や介護福祉士をめざす本学の学生たちに、赤十字の理念に裏打ちされた災害・防災ボランティアとなるための赤十字ボランティア教育プログラムを提供し、その学びの成果を、秋田のこどもたちや高齢者を含む住民のみなさんに還元・共有して地域社会に貢献することを目的としています。ここで大切なのは、決められシナリオ通りに防災訓練を重ねることではなく、参加者一人ひとりが、問題に気づき、自ら考え、解決に向けて行動する力を身につけること。同時に、キャンプの楽しさを実感しながら、防災･減災のエキスパートへと成長することです。「赤十字みんなの防災キャンプ」をさらに発展させるべく、日本赤十字社秋田県支部をはじめ、秋田赤十字病院、キャンピング用品メーカーやスポーツショップなどの企業、自治体、NPO、報道機関のみなさんとも密接に連携しながら、今後もこの取り組みを続けていきたいと考えています。

キャンプを楽しみながら防災を学ぶ

日本赤十字秋田短期大学
助　教
及　川　真　一

東日本大震災以降、全国各地で防災教育の活動報告がされております。防災教育の重要性はわかっているが、なかなかそのような防災への取り組みに参加しづらい、難しそうなどの声も多く聞かれます。防災教育は家庭環境から始めることが大切だと感じております。防災教育を行う上で注意したいのは、無理にやらせようとしないことです。「しなくてはいけない」を強いることで、「防災はつまらない」という気持ちをもたせてしまう恐れがあるからです。興味をもたせながら学ぶことが理想です。経験は心を強くします。災害時の困難を疑似体験することで、万が一災害にあった時に心に余裕が生まれます。

そこで、考えたのがキャンプでした。電気やガス、通信手段がないキャンプは、ライフラインが途絶えた災害時に活かせる要素が満載です。こうして楽しみながら覚えることが、災害発生時のストレスを軽減するのにも役立ちます。非日常の環境下で、いかに災害を乗り切るかが防災であり、いかに快適に楽しむかがキャンプです。キャンプを通じて、防災に対する知識やスキルを学んだ学生は、災害時のさまざまな問題解決に向けて、気づき・考え・行動することの大切さと「実践力」を身につけました。

第8回「もっとクロス！大賞」で準グランプリ受賞！

平成20年度より毎年開催されている日本赤十字社もっとクロス！大賞。
全国の日赤支部・病院・血液センターなどで取り組んでいる広報活動のコンテストのことです。121エントリーの中からベストテンに残り全国の担当者の前でラストプレゼンを行い、見事に準グランプリに輝きました。

本学の取り組みである「赤十字みんなの防災キャンプ」が、第8回「もっとクロス！大賞」（2015年度）の準グランプリに輝きました。「もっとクロス！大賞」は、日本赤十字社が主催し、毎年全国の赤十字施設が取り組んだ広報活動の中から優秀な事例を共有して広報力を高めることを目的とするキャンペーンです。

2015年度着任した若手教員からのメッセージ
～本学の災害救護訓練に参加して～

オオ　ヤマ　ヒト　シ
大　山　一　志

職　名／助教　　出身地／青森県八戸市
趣　味／ルアーフィッシング

本学に着任以来、はじめての災害救護訓練となりました。私は搬送の担当者として、訓練活動を観察させていただきました。搬送班はトリアージされた負傷者を重症度別にテントに搬送する役割を担っておりました。次々と押し寄せる傷病者を、優先順位を考えながら運ぶとともに、何度となくテントの間を行き来しなければならず大変な重労働となっておりました。直向きに取り組む学生の姿に、赤十字としての理念が学生の中にしっかりと培われていることを実感いたしました。同時に、私自身もあらためて赤十字の一員に加わったことと、その使命を自覚する機会となりました。

オ　ノ　マ　ミ
小　野　真　美

職　名／助手
出身地／秋田県秋田市
特技・趣味／マラソン

本学の災害救護訓練は、全学生・全教員が合同で行う訓練です。私は、主にトリアージ・搬送・応急処置班の学生と関わりました。学生同士が積極的に声を出し合い協力する場面を通して、傷病者の気持ちに寄り添った声かけや援助を行う姿をみることができました。本学の教育は、人道に基づき人を尊重し、尊厳と権利を守るという理念があります。災害救護訓練からは、その理念をもとに訓練に参加する学生の姿勢を感じることが出来ました。

コ　ダマ　ユウ　キ
児　玉　悠　希

職　名／看護学部　助手
出身地／秋田県男鹿市（旧若美町）
特技・趣味／スノーボード、草野球、読書

近年、全国各地で深刻な災害による被害が報告されており、社会全体で被災者を支援していこうという認識が強まっているように感じます。そのような背景を受けて災害支援に関わる教育に参加できたことは、とてもうれしく思います。また、参加者にとっては、他者との協力や自律的な活動の重要性の認識を育む良い機会であるとも感じました。いざという時に生きるのは、人と人の絆であるということを再認識するよい機会となりました。

ハリ　マ　ユウ　コ
播　摩　優　子

職　名／助教
出身地／秋田県能代市
趣　味／読書、映画鑑賞

平成27年9月に採用になりました播摩と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

災害救護訓練に参加させて頂き、実際に災害が起こったことを想定し、学生が救護活動や避難所での支援活動などを懸命に取り組む姿に感銘を受けました。このような学生時代からの取り組みが、災害時や実践の場で、対象者の立場に立って考えながら、率先して支援活動ができる力になるのだと感じました。

ワタ　ナベ　カ　ナ　コ
渡　部　加奈子

職　名／助手
出身地／秋田県三種町（旧八竜町）
特　技／バレーボール

私は病院勤務時、赤十字の災害救護活動について知っていましたが、実際の災害救護に出向くということはありませんでした。しかし本学に勤務し、災害救護について私自身も学生とともに考え、その重要性を強く感じています。今年度初めて本学の災害救護訓練に参加し、災害救護活動の基礎的能力、的確かつ迅速な判断能力、支援者の役割等を学生が理解し取り組む姿に、私自身、刺激を受けました。災害救護訓練を通して、日頃からの取り組みや訓練の大切さを改めて感じました。

ワタ　ナベ　ヒロ　コ
渡　邊　紘　子

職　名／看護学部　助教
出身地／秋田県秋田市（埼玉県生まれ）
趣　味／お菓子・パン作り、最近は編み物にハマり中
特　技／卓球（現在も日赤病院のチームに加入し、全国大会に出場しています）

私は今年度初めて災害救護訓練に参加し、避難所支援の主担当教員でした。看護学科および介護福祉学科の2年生が支援者の役割でした。支援者の皆さんが避難者1人1人に目線を合わせ、思いに寄り添おうと努力する姿に、大変感動したことを覚えています。将来専門職業人として支援する立場になった時、必ずや多くの方々のお役に立てることでしょう。災害発生時、皆さんが自分の頭で考え、自ら行動することができるよう、これからもより多くの経験を積み重ねて欲しいと思います。

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

日本赤十字社・公式マスコットキャラクター
ハートラちゃんが誕生しました！

5月8日、赤十字創設者のアンリー・デュナン生誕にちなんで制定された世界赤十字デーに、日本赤十字社の公式マスコットキャラクター「ハートラちゃん」が誕生しました。

「苦しんでいる人を救いたい」という強い思いで、ハートランドの森からやってきたハートラちゃん。おでこの赤十字標章、大きなハート型の耳や真っ白な体に赤いしま模様がチャームポイントです。

今後、日赤の活動を皆さんに広く知っていただくために活躍しますので、ハートラちゃんをどうぞよろしくお願いします。

カリヨン No.5
■発行日／平成28年3月11日　■発行／日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学
■編　集／日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学　情報・広報委員会　〒010-1493 秋田県秋田市上北手猿田字苗代沢17番地3　TEL.018-829-4000